



Ludwig van Beethoven: Complete String Quartets

aud 21.454

EAN: 4022143214546



Record Geijutsu (01.09.2018)

THE RECORD GEIJUTSU Disc Review

Japanische Rezension siehe PDF!



大木正純 ● Masazumi Oki

【準】 イタリアのクレモナ四重奏団（2000年結成）によるベートーヴェン弦楽四重奏曲全集8枚組。2012年から2015年にかけて、ドイツのレーベルに1枚ずつ積み重ねてきたツイクルスだが、日本の国内盤としては、全部まとめた形で初お目見えとなった。収録作品は16曲プラス2曲。《大フーガ》はもちろんだが、もうひとつ、例外的に弦楽五重奏曲ハ長調作品29を収めている。これは大歓迎だ。緩徐楽章がとびきり美しい。

さてこのクレモナ四重奏団、精細にして切れ味鋭い技術を備え、総じて強弱のメリハリとアクセントの強い表現で押し寄せてくるタイプだが、同時にゆきすぎない平衡感覚も持ち合わせているという意味でも、すぐれて現代的なクルワレットであることは間違いない。加えて、堅固なアンサンブルからおのずとイタリアの歌心が溢れ出てくるように、独自の持ち味がある。しかもこの全集の場合、豪華に用意した名器たちをさまざまに持ち替えて演奏するなど、極上の響きを徹底して追求するほか、ディスク1枚1枚のプログラムにも工夫を凝らす（それぞれ初期作品と中期・後期作品とのカップリングが基本だが、その構成がなかなか味わい深い）など、聴きどころがいっぱい。全体として、高い評価に値する労作である。

にもかかわらずあえて「推薦」としなかったのは、率直に言ってこの演奏にはさらに磨き、練り上げる余地が、なお残されていると思うからだ。全体的にみて初期作品、とりわけ第4番のような、方向性の明快な、インパクトの強い曲は、引き締まった見事な仕上がりを示している。あるいはくつなくない第3番の場合、若書き特有ののびやかな魅力に溢れて爽快だ。それに対して一部の後期作品には、できればいっくらかムラがあるようにみえなくもない。たとえば早い時期に収録された第16番には、どこか自然な流れを掴み切れないうもどかしさを感じられるのに対して、3年あとの録音である第13番になると、心なしか重奏に自信と風格が漲り、ぐんと堂に入った演奏になっているように思われるのである。明らかに、彼らは数年にわたるこのレコーディング・ツイクルスを通じて、ベートーヴェンにより近づき、成長を遂げたのに違いない。最後に取められている第10番《ハーブ》第2楽章（緩徐楽章）の、きわめて繊細な美しさも、そのことを裏付ける有力な証拠のひとつである。

石田善之 ● Yoshiyuki Ishida

【録音評】5回に分けて収録され8枚にまとめられている。使用楽器の違いなどはあるようだがサウンドの統一感はずばらしく、特に響きに大きな個性や特徴があるということではなさそうだが質の高い間接音で量的にはさして多くなさそう。音は非常に明瞭で、しつかりとした演奏の状態がスピーカー再生上からも十分に伝わってくる。第1ヴァイオリンがやや目立つ印象だが、サラウンドでは弦楽器独特のふくよかな音の幅が表現され、音像的にも鋭さがなく有利な大きな違いはなさそう。
(92/92/93)



■ベートーヴェン/弦楽四重奏曲全集

【全18曲】
（詳細は巻末新譜一覧表参照）
クレモナ四重奏団、ローレンス・ダットン (va)
【オーディオ】KKC5900 (8枚組)
CD&SACD ¥8796

中村孝義 ● Takayoshi Nakamura

【推薦】非常に新鮮な感覚に満ちたベートーヴェンの弦楽四重奏曲全集の登場だ。2000年に創立されて以来メンバーの交代もなく、今やイタリアを代表する四重奏団になったクレモナ四重奏団が、結成10年を超えた2012年から足掛け4年をかけて録音した全集だ。ちょっと面白いのは、初期、中期、後期と分けて録音するのではなく、どの1枚をとっても、作曲時期の異なる作品で構成するという姿勢を堅持していることだ。こうすることで、確かに1枚ごとにベートーヴェンという作曲家がいかに広大で多彩な表現域を持ったとんでもない作曲家であったかが手に取るように分かる。そしてそれは1枚目からすでに顕著だ。初期の第6番で、ベートーヴェンがこの領域で最初から途方もない完成度の高さを示していたことが完璧なアンサンブルと表出性に満ちた表現で驚くほど精密に演奏された後、超激的な表現で第11番が聞こえてきたときは度肝を抜かれた。両曲の間にある隔たりの大きな表現世界には唖然とするばかり。しかしこれこそがベートーヴェンなのだ。それをこんなにも見事に示してみせるクレモナ四重奏団の並々ならぬ力量の凄さ。その後に最後のあの悟り切った第16番が、しかし非常に高い緊張感と余裕をもって密度濃く示された時の何とも言えない充足感。何とこの1枚でベートーヴェンの弦楽四重奏世界の広大な世界が凝縮して見渡せちゃうのだ。しかも曲によって使用楽器まで吟味し替えながら、2枚目以降でもそれが味わえてしまうのだから何という全集だろう。2枚目に取められた第8番における抜けきったクリアな音色で奏でられる気品の高い抒情や切れ味の良リズム感を駆使した爽快感、第12番における驚くほど充実した厚みのある響きに乘って澄み切った第1ヴァイオリンが奏でる世界の何とという精神的充実。3枚目の第4番におけるコンパクトながら中期を十分に予感させる迫真性や、第7番の覇気があふれるほどの劇的推進力、《大フーガ》における恍惚感覚えさせざるほどの強固で精密なアンサンブル。こうして挙げていけばきりが無いほど、どの曲も斬新で圧倒的な説得力を持った演奏が展開される。それが録音を重ねるにしたがってますます密度を増し、同じ2015年11月の4日間に集中して録音された6枚目以降の3枚における演奏など技巧的にも音楽的にも目の覚めるような鮮やかなもので、聴いていて心底圧倒された。これは本当に素晴らしいといかないような全集である。